発達支持的生徒指導を取り入れた学級経営の推進

－生徒指導の４つの視点を取り入れた授業づくりと学級づくり－

名取市立増田中学校　　畠山　大介

１　はじめに

(1) 本校の実態

本校は全校生徒 800 名を超える大規模校である。昨年度の 30 日以上の長期欠席生徒の割合は７％を上回り、教員が個別な対応を行っている。

本校の令和６年度全国学力・学習状況調査[1)]では自己有用感に関する内容の「先生方は、あなたのよいところを認めてくれている」や「将来の夢や目標を持っている」の肯定的な回答は、全国や県平均を上回った。一方で、「学校で大人に相談できる」（全国比-9.2 ポイント）と「学校に行くのが楽しい」（全国比-9.8 ポイント）の肯定的な回答は、全国や県を大きく下回った。「友達関係に満足している」（全国比-6.3 ポイント）もやや下回った。

(2) 生徒の実態

本研究の対象は第１学年の１学級（約 30 名）である。５月に全国学力・学習状況調査と同じ質問内容で意識調査（表１の①～⑦）を行った。調査では、「②先生方は、あなたのよいところを認めてくれている」や「⑤困りごとや不安がある時に、学校にいる大人にいつでも相談できる」の項目で肯定的な回答が全国平均を大きく下回った。また、生徒指導の４つの視点の内容に沿った質問（表１の⑧～⑪）では「⑪学級では、ルールが守られ、他者から傷つけられないという安心感がある」（安全・安心な風土の醸成）の項目で肯定的な回答の割合が低かった。

表１　意識調査　令和７年５月（ｎ＝29）実施
（本学級の肯定的な回答の割合　単位は%）

質問内容	割合	全国比
①自分にはよいところがあると思いますか。	86.2	＋2.8
②先生方は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。	75.9	-14.4
③将来の夢や目標を持っていますか。	71.8	＋5.5
④人が困っているとき、進んで助けていますか。	79.3	-10.7
⑤困りごとや不安がある時に、学校にいる大人にいつでも相談できますか。	44.8	-22.6
⑥学校に行くのは楽しいと思いますか。	82.7	-1.3
⑦友達関係に満足していますか。	86.2	-3.9
⑧先生方や仲間から学級の一員として認められていますか。	93.1	
⑨学級では先生方や仲間から理解され、受け入れられていますか。	96.6	
⑩学級では自分の考え、選択、決定が尊重されていますか。	79.3	
⑪学級では、ルールが守られ、他者から傷つけられないという安心感がありますか。	51.7	

２　研究の内容と方法

(1) 研究の目的

本研究の目的は、研究対象の学級で発達支持的生徒指導を取り入れた授業づくりや学級づくりを行い、心理的安全性の高い学級経営及び、校内での発達支持的生徒指導を推進することである。

(2) 研究と検証の方法

研究主題に迫るために、発達支持的生徒指導の中でも生徒指導提要[2)]「1.1.2 生徒指導の実践上の視点」を参考にした４つの視点を取り入れた授業づくりと学級づくりを年間通じて行う（表２）。授業での生徒の振り返りシートの記述（検証方法①）や、研究対象に行う生徒意識調査（検証方法②）、学校生活アンケートの結果（検証方法③）から、発達支持的生徒指導を取り入れた学級経営の効果を検証する。また、以上の内容について校内の授業検討グループや初任者層と互いにどのような実践を行っているか等、情報交換を行い、発達支持的生徒指導を意識して生徒に働き掛ける体制づくりにつなげる。

表２　生徒指導提要「1.1.2 生徒指導の実践上の視点」を参考にした４つの視点による取組

① 自己存在感の感受
〈授業づくり〉「～さんのつぶやきについてどう思う？」「～さんのグループではこんな意見が出ていました」など発言を取り上げたり、「できるようになったね」や「粘り強く取り組んでいるね」など個人の成長を励ましたりする声掛けをする。
〈学級づくり〉感想文や学級日誌のコメントを朝の会で紹介する。係や委員会の仕事の様子を帰りの会で紹介する。欠席した生徒には翌日に担任から「体調はどうですか？」「困りごとはない？」など、自分が学級の一員として感じられるような声掛けをする。
② 共感的な人間関係の育成
〈授業づくり〉生徒同士が協力し、教え合うことができるような学び合い活動の場面を教師がファシリテートする。「分からないことを互いに相談する」場面の習慣化や生徒が「スモールティーチャー」の役割を担う機会を増やす。生徒同士の学びや活動を認め合い、フィードバックし合う機会を設ける。
〈学級づくり〉困っている生徒には、「失敗するから成長する」「いつでも人に頼って良いよ」、学級全体にも「困っている人がいたら迷わず助けよう」など積極的な声掛けを行い、学級内で「助け合い」の文化を醸成する。
③ 自己決定の場の提供
〈授業づくり〉自分の考えを持って活動できるように一人で考える時間を十分に確保する。取り組む課題や解決方法を自分で決めさせる。
〈学級づくり〉朝の会でニュースの話題や学級での諸問題を取り上げ、自分はどう思うか考えさせる。相談があったときに

は、生徒と一緒に考え、最後は「～さんはどうしたいの？」など生徒が決められるような声掛けをする。
④　安全・安心な風土の醸成
〈授業づくり〉生徒の質問や、「分からない」という発言を教師が「よく勇気を出したね」など、承認して肯定的にフィードバックする。学習が苦手な生徒には机間指導で丸付けを行い、安心して活動に取り組めるように声掛けをする。生徒が分からないときに「分からない」と発信できるような学習形態の工夫や支援をする。
〈学級づくり〉質問や相談しやすいよう、担任との１行日記のやりとりを行う。また、授業前後の休憩時間にも教師が生徒といる時間や、生徒に話し掛ける機会を意識的につくる。学級で安全かつ安心して生活を送るためにはどんなことに気を付ければ良いか考える機会を設ける。

３　授業実践Ⅰの取組と考察

(1) 実践内容の概要

実施日	令和７年６月 30 日（月）３校時
対象	第１学年の１学級（約 30 名）
単元名	数学「２章　文字と式」

授業実践Ⅰでは意識調査（表１）の結果から、特に以下の２つの発達支持的生徒指導を取り入れた授業づくりを行った。

①　自己決定の場の提供

学び合い活動やグループ活動で、課題を自ら考えて選択し、決定できるように、発問の後に一人で考える時間を十分に確保した。類題で取り組む課題を３種類から選ばせ、一人で取り組むか、学び合い活動で解くかなど学習形態を自分で決めさせた。

②　安全・安心な風土の醸成

数学を苦手にしている生徒には、教師が先に支援を行ったり、既に問題を解き終わった生徒と学び合い活動をファシリテートしたりして、生徒が安心して活動に取り組めるようにした。

〈授業実践Ⅰまでの学級づくり〉

毎日の帰りの会で、生徒は１行日記を記入し、翌日に担任がコメントを入れて返却した。記述する内容は特に指定せず、学校や家庭での出来事、趣味や悩みについてやり取りを行った。また、行事の感想や学級日誌の日直のコメントを朝の会や帰りの会で紹介し、個人や学級の成長を励ます声を掛けた。

(2) 成果

①　自己決定の場の提供（授業づくり）

授業の中で自ら考え、選択し、決定できる、あるいは発表できるような学習方法や演習課題を設定したことで、数学が苦手な生徒も積極的に互いに質問する等、意欲的な取り組みが見られた。

②　安全・安心な風土の醸成（授業づくり）

苦手な生徒には先に支援を行い、安心して活動できるように声掛けをしたり、学び合い活動で生徒同士が協力したりしたことで、「友達に聞いたことで授業が理解できた」という生徒の声も多かった。

(3) 課題

①　共感的な人間関係の育成（学級づくり）

面談で生徒から友達関係の話を聞くと、他人が困っているときに、助けたい気持ちがあるものの、どのように助けて良いのか分からずに、行動ができない生徒が一定数いた。

②　安全・安心な風土の醸成（授業・学級づくり）

授業で、自分の意見を発表したり、分からないことを友人や教師に相談したりすることに抵抗を感じる生徒も見られた。また、困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる生徒が限られていた。授業や学級での教師の支援の工夫や継続が必要である。

４　授業実践Ⅱの取組と考察

(1) 実践内容の概要

実施日	令和７年 10 月 21 日（火）３校時
対象	第１学年の１学級（約 30 名）
単元名	数学「４章　比例と反比例」

授業実践Ⅱでは授業実践Ⅰの課題を踏まえ、特に以下の２つの発達支持的生徒指導を取り入れた授業づくりを行った。

①　共感的な人間関係の育成

授業では「スモールティーチャー」を取り入れた学び合い活動や、グループ活動を通して、互いに分からないことを相談する場面や教え合う機会を設定した。また、授業の様子の写真や学習プリントで生徒同士の学びや活動を認め合い、振り返る機会を設けた。

②　安全・安心な風土の醸成

生徒の質問や、「分からない」という発言を教師が「よく勇気を出したね」など、承認して肯定的にフィードバックした。生徒には、付箋を机に貼ることで教師や友人に困っていることを意思表示しやすいようにした。また、生徒が安心して活動に取り組めるように、授業実践Ⅰで行った教師が机間指導で先に採点することやヒントの声掛け等の支援、既に問題を解き終わった生徒との学び合い活動のファシリテートは継続した。

〈授業実践Ⅱまでの学級づくり〉

夏休み前や１学期の終わり、行事後の学級活動の時間を活用し、一人１分程度で面談を行った。その際に「～さんは～できるようになったね」や「何か困っていることはない？」等の声掛けを行った。また、定期的に実施している「学校生活アンケート」内の「学級などで困っていることや悩んでいることはありますか」の欄へ記入した生徒には、個別に「勇気を出して相談してくれたね」等の生徒が安心できる声掛けを行い、今後の対応を「～さんはどうしたいの？」をキーワードにして、一緒に解決策を考えた。

〈授業実践Ⅱまでの校内体制づくり〉

校内での発達支持的生徒指導の推進に向けて、以下の内容で、教員向けの勉強会を計画し、実践後に初任者層の先生方と発達支持的生徒指導の情報交換を行った。

実施日	令和７年８月 21 日（木）
対象	初任者層（１～３年目）の教員を含む 11 名
内容	①発達支持的生徒指導について （講師：令和５年度生徒指導研究グループ　原勇太教諭） ②発達支持的生徒指導の情報交換

勉強会に参加した初任者層の教員への事後アンケートから以下の回答を得た。

発達支持的生徒指導を知っていましたか。	知っていた	言葉は知っていた	知らなかった
	２人	５人	０人

〈感想から〉

○発達支持的生徒指導に、褒めたり挨拶をしたりすることも含まれていることに驚きでした。帰りの会で、「今日のＭＶＰ」というコーナーを作って、日直が友達を褒める活動を入れてみようと思いました。

○具体的な実践例などもお話しいただいたので、場面に応じて活用できると思いました。また、自分がこれまで行ってきた実践も発達支持的生徒指導に当たるのかなと思い、自信にもなりました。今後も続けていこうと思います。

○挨拶をする際に名前を呼んでからするなど普段していることに少し加えるだけで生徒に自己存在感を感じさせることができると知ったので実践しようと思いました。つい否定的な言動を注意してしまいがちですが、肯定的な言動を褒めることに目を向けたいと思います。

(2) 成果

① 共感的な人間関係の育成（授業づくり）

授業で学び合い活動の場面を定期的に設定したことで、生徒同士が協力し、教え合い、学び合う活動が習慣化した。また、生徒同士の学びや活動を認め合い、フィードバックし合う機会を設けたことで、意欲的に学び合い活動に取り組む生徒が見られた。

② 安全・安心な風土の醸成（授業づくり）

「分からない」という発言を「よく勇気を出したね」など肯定的なフィードバックを継続したことで生徒同士や、教師に「分からない」という発言をしやすい環境になった。また周囲の友人に声を掛けることが苦手な生徒も、付箋を机に貼ることで意思表示し、机間指導での支援につなげることができた。生徒からも、「友達同士で協力し質問して疑問を解決したことで、安心して学習に取り組めた」という声が出た。

③ 共感的な人間関係の育成（学級づくり）

学級では、困っているに友人に声を掛けて手伝う場面や、授業での発表を頷いて聞く生徒の様子がよく見られるようになった。相手の立場に立って考えた行動をできる生徒や、その行為を実感し、感謝の気持ちを学級日誌や日記へ記入する生徒も増えた。

(3) 課題

① 共感的な人間関係の育成（授業づくり）

学級全体にも「困っている人がいたら助けよう」など積極的な声掛けを行っているが、人間関係が固定化し、授業での学び合い活動も、普段話す友人での活動に終始し、活発な意見交換につながらない場面が見られた。

② 安全・安心な風土の醸成（学級づくり）

生徒との１行日記のやりとりを毎日行ったり、授業前後の休憩時間にも話し掛ける機会を意識的につくったりしたが、困りごとや不安がある時に、自分から先生や学校にいる大人にいつでも相談できる生徒が限られている。

５　研究の成果と課題

(1) 検証

①生徒の振り返りシートの記述

生徒の授業実践Ⅱの振り返りシートからは以下の振り返りが出た。

○自分一人で考えても分からないところがあったけれど、友達とやったら分かったことが増えてうれしかったです。

○みんなで意見を出し合って、答えまでたどり着くことができた。～さんに教えてもらって分かりやすかった。

○友達との学び合い活動で「こうじゃない？」とたくさん意見を出し合えて、学ぶことができました。

○～さんのひらめきがあって解決できたので良かった。友達とやることで、楽しく理解することができた。

②生徒意識調査

３回実施した生徒の意識調査（表３）で、今回の研究の成果（質問内容①②④⑧）や課題（質問内容⑪⑤）と考えられるものは以下の項目だった。

表３　意識調査　令和７年５月（ｎ＝29）、７月（ｎ＝29）、10 月（ｎ＝28）実施

○肯定的な回答の理由　●否定的な回答の理由

質問内容	５月	７月	10 月	全国
①自分にはよいところがあると思いますか。	86.2	79.3	92.9	83.4
②先生方は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。	75.9	100	96.4	90.3
○相談してくれたり、声を掛けてくれたりしているから。 ○二者面談で、良いところを褒めてくれるから。 ○授業中に褒めてくれるから。				
④人が困っているときは、進んで助けていますか。	79.3	86.2	85.7	90.0
⑧先生方や仲間から学級の一員として認められていますか。	93.1	96.5	96.6	
○先生や友人に手伝ってほしいと言われることがあるから。 ○先生に声を掛けてもらったりするから。 ○学校に来たらいつもみんなが話し掛けてくれるから一員として認められていると思うから。 ○授業のときに、「ここ教えて」と言われて、感謝されることが多いと思ったから。 ○困っているときや助けてほしいときに助けてくれる人たちや自分を頼ってくれる人がいるから。 ○しっかりと係や委員会の仕事をしているから。				

⑪学級では、ルールが守られ、他者から傷つけられないという安心感がありますか。	51.7	62.1	60.7	
⑤困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか。	44.8	44.8	28.5	67.4

○話をしやすい先生がいるから。
○真剣に相談に乗ってくれそうだから。
○いつも先生やお母さんと話しているので話しやすいから。
●困り事があっても自分の中で解決できると思い、相談しないから。
●友達には相談しているけど、先生には少し話しづらいから。
●普段話さないので相談しづらいから。
●先生とは話しにくいから。

③学校生活アンケート

本校で行っている「学校生活アンケート」（表４）内の「学級などで困っていることや悩んでいることがある」の欄へ記入をし、担任と相談を行った人数は、以下のように変化した。

表４　学校生活アンケート　ｎ＝32

質問内容	５月	６月	９月	10 月
学級などで困っていることや悩んでいることはありますか。	４人	８人	７人	８人

〈主な内容〉
・授業についていけない等、学習の悩み
・友人関係の悩み
・学級内のトラブルについて

４回のアンケートを通じて、悩みを記入できる生徒の人数が増加した。10 月までに学級の約５割の生徒と、このアンケートへの記述をきっかけに個別に相談の機会を設けることができた。

(2) 成果

生徒の意識調査（表３）の結果の中で、「②先生方はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の項目は、３回の調査で肯定的な回答の割合が向上した（５月 75.6%→10 月 96.6%）。回答理由に「二者面談」や「相談」、「授業中」の言葉が出ていたことからも、定期的な二者面談や機会を見付けての相談での声掛けや、授業中の「できるようになったね」「～さんにもこの考え方を教えてあげて」などの声掛けは、生徒の自己有用感に良い影響を与えたと考えられる。

「⑧先生方や仲間から学級の一員として認められていますか」の項目も、３回の肯定的な回答の割合が高かった（5 月 93.1%→10 月 96.6%）。回答理由にあった「授業中の教え合い」や「頼ってくれる友人」「係や委員会の仕事」という言葉からも、学び合い活動を含めた授業づくりや係や委員会の仕事の様子を帰りの会で紹介することは、自己存在感を感受させることに一定の効果があったと考える。

発達支持的生徒指導の教員勉強会では、初任者層の教員と互いに「学級でどのような実践を行っているか」「今までの指導は、発達支持的生徒指導に当たるか」等、情報や意見の交換を行い、発達支持的生徒指導を意識して生徒に働き掛けるきっかけづくりにすることができた。また、授業実践Ⅱの参観を通じて、他の教員の授業内の発達支持的生徒指導の実践につなげることができた。

(3) 課題

生徒の意識調査（表３）の結果の中で、「⑪学級では、ルールが守られ、他者から傷つけられないという安心感がありますか」の肯定的な回答の割合は、低いままだった。また、「⑤困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の項目は、調査で肯定的な回答の割合が減少した（５月 44.8%→10 月 28.5%）。回答理由の「話しづらい」や「普段話さない」から、困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる生徒が限られていることが分かった。一方、学校生活アンケート（表４）には困っていることや悩みを記入できる生徒が一定数いた。今後、対面での相談や面談に加え、１行日記でのやりとりやアンケート等、生徒が困ったときに、相談する手段を複数用意しておく必要性を感じた。

(4) まとめ

今回の研究では、生徒に対しての挨拶や声掛けといった日頃行っている指導や取組が生徒指導ともつながっていると意識し、取り組んだ。意識調査の結果や生徒の授業の振り返りからは、生徒の「自己存在感」の感じ方の変容が見られた。また、授業中の学び合い活動からは「共感的な人間関係」の醸成が感じられる場面が見られるようになってきた。今後も、これまで当たり前のように取り組んできたことを、教員間で共通認識を持って行うことで、学校が生徒にとって、より安心できる居場所につながっていくと考えられる。今後も実践を継続し、生徒が心理的安全性を感じるための生徒指導の研究に取り組んでいく。

【引用・参考文献】

１）　令和６年度全国学力・学習状況調査結果
２）　文部科学省（2022）「生徒指導提要」

【図表等の許諾について】

振り返りシートの記述、生徒意識調査、学校生活アンケートの結果は、氏名や個人が特定できるものは掲載せず、研究の目的にのみ使用することとし、生徒の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。